

調査区位置図（平成 28 年度都市計画基本図に「近世吉田城の構造」
※太い赤線が今年度調査区、細い青線は令和 6 年度調査区
（『市内埋蔵文化財発掘調査 III(H24・25)』をトレース）を合成（1/7,500）

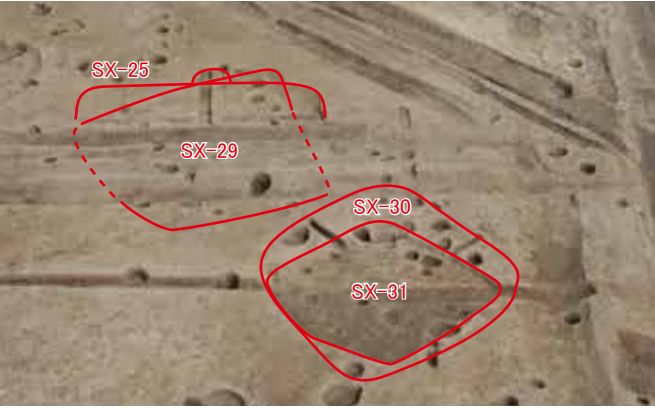
1. 古代

今回の調査区では、古代東海道の側溝と考えられる溝をはじめ、井戸や^{たてあな}堅穴状遺構などの古代の遺構が検出できました。東海道に関しては別項にて詳述します。SE-39 は円形の井戸です。SE-41 は方形の井戸で、東海道の側溝と同様の方向に傾いています。調査区南部では、堅穴建物の可能性のある落ち込み(SX-25・29・30・31)を検出しました。SX-25 は北側には埋土に^{しょうど}焼土を含む^{どこう}土坑が接しており、かまどの痕跡の可能性があります。残存状態が悪く詳細は不明です。また、SK-7130 は鉢(甕?)、^{はち}壺、^{かめ}碗1点ずつを一組としたものが、直線状に三組並べて埋められた遺構です。目的は不明ですが、何らかの祭祀遺構ではないかと考えています。

また、注目すべき出土遺物として、^{まるとも}丸鞆という石製帯飾りがあります。^{せきたい}石帯と呼ばれるベルトにつけられる飾りで、^{かんじん}官人の身分を表す装身具とされ、^{そうしんぐ}渥美郡衙との高い関連性が考えられます。



土器埋設土坑 (SK-7130)



堅穴状遺構 (SX-25・29～31)

2. 中世

今回の調査では、中世東海道の側溝と考えられる溝のほか、^{どこうぼ}土坑墓、井戸などの中世の遺構が検出できました。東海道に関しては別項にて詳述します。土坑墓は計4基見つけられました。いずれも東海道の側溝と同様の方向に長い長方形で、道沿いにあたる場所に位置します。SE-37 は円形の井戸です。SE-42 は方形の井戸で、東海道側溝と同様の方向に傾いています。SX-35 は約3m×16mの大型土坑で、地下室(地下式坑)や排水施設のようなものの可能性があります。詳細な用途はわかりません。底面は平らですが途中に^{あぜ}畔が2か所設けられています。出土遺物から、酒井氏もしくは池田氏が城主の時期の遺構と考えられ、近世以前の吉田城周辺整備にかかわる遺構かもしれません。



SX-35

3. 近世

前回調査と同様、今回の調査でも最も多く検出した遺構が、近世(特に江戸時代中期から幕末)の遺構です。主に藩士屋敷地の遺構と考えられます。前回見つかった^{ふくろうじ}裏袋小路と呼ばれる道路(SF-1)の続きも北側に検出できました。また、絵図から屋敷境と想定される位置には、区画溝と考えられる溝が検出でき、絵図通りに屋敷地の区画が復元できました。他にも掘立柱建物や^{さくれつ}柵列、井戸、地下室や^{ちよすいそう}貯水槽と考えられる大型の落ち込み、池なども見つけられました。また、建物の周囲をめぐる^{あまお}雨落ち溝(SD-255・306)も検出しました。池は前回調査では1基のみでしたが、今回調査では複数基見つけられ、礫で護岸したもの(SG-3・5)、漆喰で土間打ちしたもの(SG-2)など多様な形を確認できました。またSG-4～6では、区画溝からの^{どうすい}導水施設も確認できました。

特殊な遺構としては、銅の^{ろへき}鑄造炉(SL-2)が見つけられました。底面を漆喰で土間打ちし、粘土で作った炉壁で囲った中心に、陶器の壺をひっくり返したものを設置しています。この上に^{るつぽ}埴塙を置くなどして、鑄造を行ったと考えられます。周辺では埴塙や^{とりべ}取鍋、^{いがた}鋳型、炉壁の破片のほか、^{てっさい}鉄滓なども出土しており、銅の鑄造だけではなく鉄製品も含めた金属加工を行っていたと考えられます。



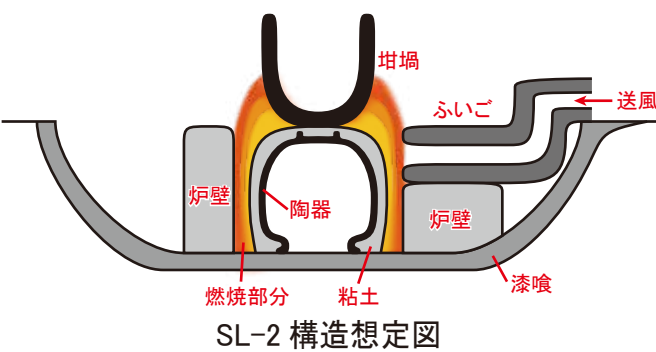
池 (SG-3)



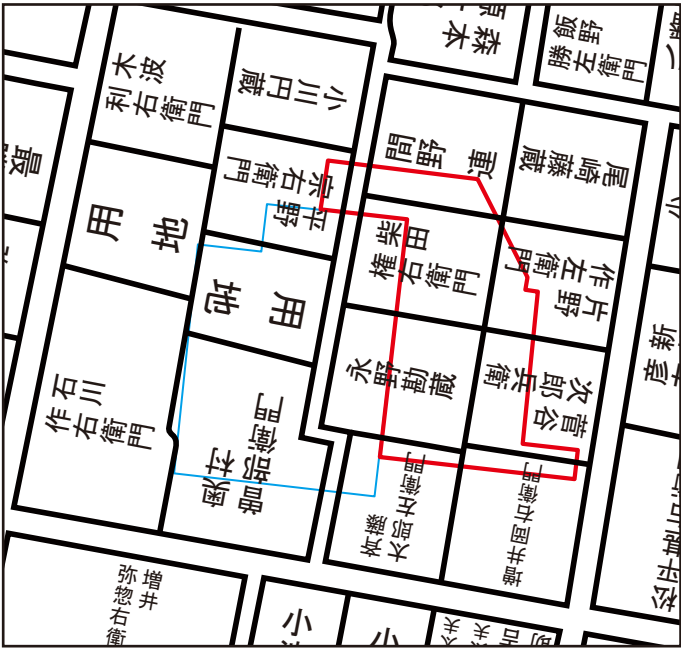
貯水槽 (SK-7323)
壁面や底面に漆喰を塗った貯水槽。



銅の鑄造炉 (SL-2)



SL-2 構造想定図



「吉田藩士屋敷図(弘化4(1847)年)」
(『吉田城遺跡2』より転載)

古代・中世東海道関連遺構図(1/300)

古代東海道は、全国に7つある駅路^{えきろ}のうちの1つです。駅路とは、各地に配置された駅家間^{うまや えきば}を駅馬が往来するための道で、中央と地方が最短でつながるよう整備されました。国府や郡衙(郡家)など政治機関の近くを経由することが多く、物流や情報伝達を担った幹線道路です。きわめて直線的に設定され、幅も12m(もしくは9m)と規定されており、規格性の高さがうかがえます。8世紀初めごろに体系化されたと考えられ、平安時代には再整備や改変が進められました。中世以降は、微妙にルートが変わるなどして、その規格性は徐々に薄れていきます。

この地域の古代・中世東海道に関しては、様々な形で記録が残されています。一例として、承和2(835)年の太政官符^{だじょうかんぷ}には、飽海川(豊川)の渡船を2艘から4艘に増やすこととあり、東海道の再整備との関連が指摘されています。また、13世紀ごろの紀行文には、「渡津の今道」「今

橋」などの記述がみられます。これは、一次的に豊川の渡河点^{とがてん}が北(豊川市古宿町付近)に移っていたところから、再び飽海遺跡周辺を通るルートに変更されたことを表しています。

今回の調査で見つかった旧東海道の痕跡は、側溝^{そっこう}と考えられる溝と舗装の路盤^{ろばん}と考えられる礫敷^{れきじ}です。遺構の時期は、9世紀初めから16世紀までと考えられます。古代の溝は残存^{ざんぞん}状態が悪く、一部で途切れるなどしています。複数本の溝が検出できたことから、時期によって何度も作り直したため位置がずれたと考えられます。側溝は道路の両側に1本ずつで一組となりますが、SD-223・253を一組とすると、道幅が9mほどとなり、古代官道の規格とも一致します。最も深い溝SD-31・226は15～16世紀のものと考えられます。路盤は、礫^たが叩き締められたような状態で検出、礫の間には山茶碗^{やまぢやわん}の破片などがみられることから、中世のものと考えられます。



トレンチ 36 断面

今年度調査区

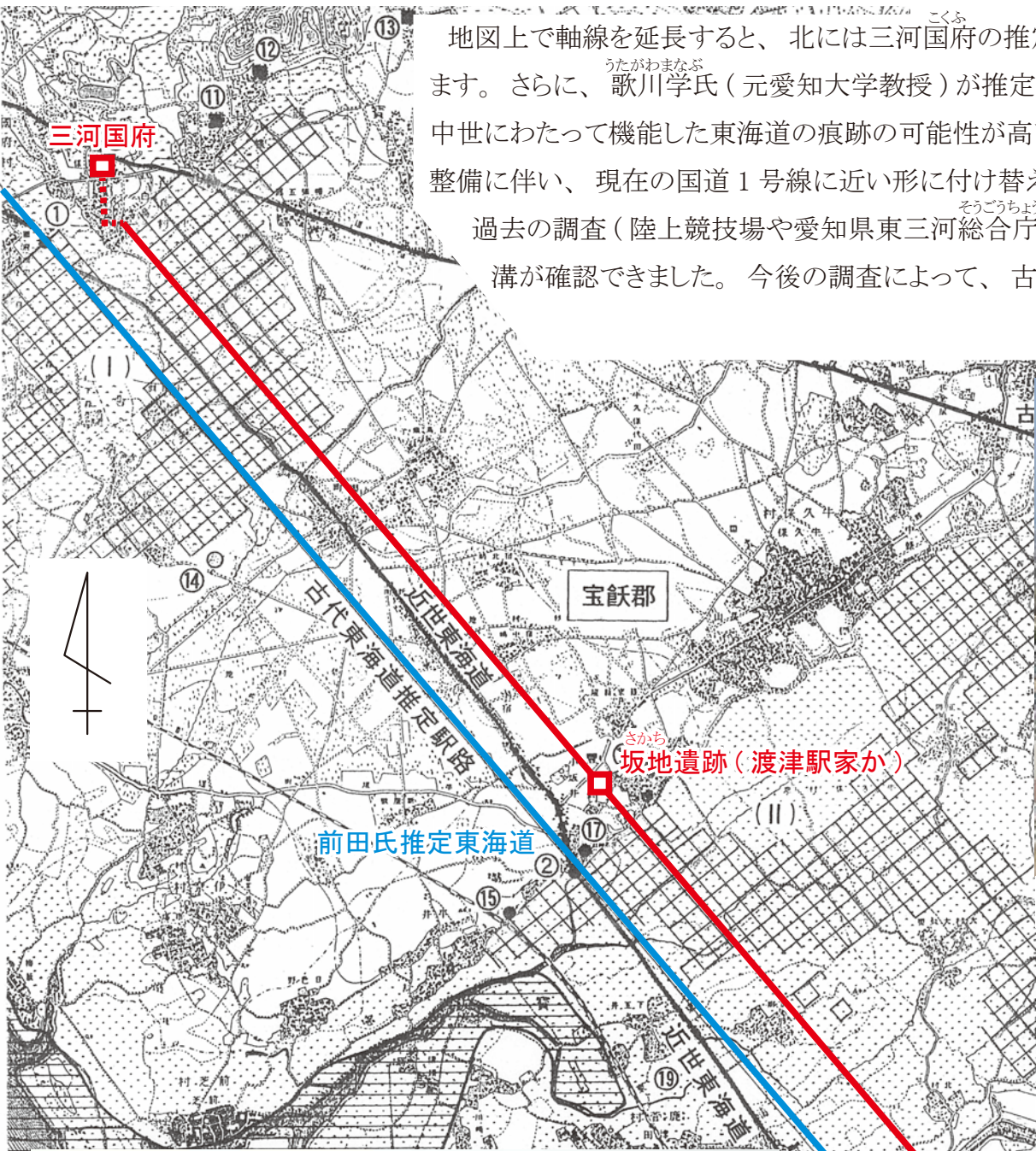
路盤 (SX-17) 検出 : 礫が敷かれた部分

- 古代
- 中世前半(鎌倉・室町)
- 中世後半(戦国)
- 路盤
- 不明

※SD-227 の一部は路盤の可能性あり

SX-52、SD-31、SX-17 断面

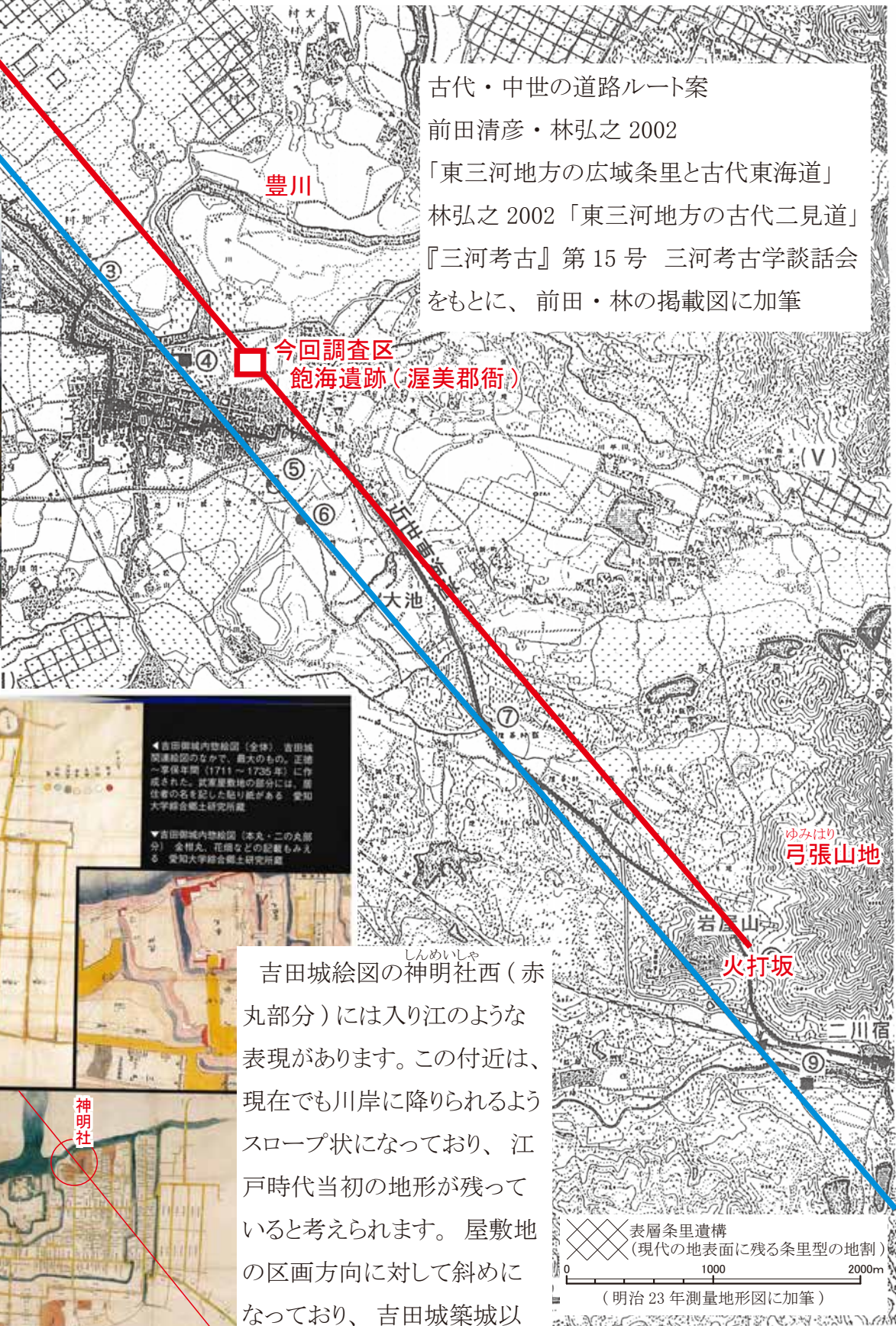
じくせん 東海道軸線延長図



調査区遠景（北西から）



調査区遠景（南東から）※赤丸付近にスロープ。



古代東海道推定駅路
基本軸



吉田城絵図の神明社西（赤丸部分）には入り江のような表現があります。この付近は、現在でも川岸に降りられるようスロープ状になっており、江戸時代当初の地形が残っていると考えられます。屋敷地の区画方向に対して斜めになっており、吉田城築城以前からの東海道の名残とも言えるかもしれません。

岩原剛 2017『三河吉田城 - 今川松平が奪いあった「水城」』